

駅前の構造

～How manyいい駅、駅はいろいろ～

32期生

I テーマ設定の理由

町の姿を克明に表わしている駅前。遠隔地から都心へ……、それは駅前の変貌が反映する1つのドラマのように感じられる。このドラマの舞台裏は人知れず眠っているが、今僕達はこの舞台裏の眠りをそっと覚まそうとしているのだ。

II 研究方法

(1) 近鉄奈良線、南大阪線（長野線も含む）の各駅前の構造を調査する。

観点 ①店の配置……駅前にある各商店を次のように分類する。

(A)医療・医薬 (B)印刷・書籍・写真 (C)運輸・通信 (D)家具・木材 (E)家庭日用品雑貨・装飾品 (F)事務用品 (G)貴金属・時計 (H)機械・器具 (I)教育・宗教・公共団体 (J)金融 (K)娯楽 (L)サービス・自由業 (M)食料品 (N)衣料品 (O)電気 (P)園芸 (Q)皮革製品 (R)百貨店・市場 (S)旅館・飲食店 (T)洒落た飲食店（例 マクドナルド、ロッセリア）

②バスターミナル・自転車置場の位置、広さ

(2) それぞれ各駅のものタイプ別に分類、共通点を見出す。

(3) それぞれ各駅の現状を調べる。

観点 ①1日の乗降者数 ②駅周辺的环境 ③町の性格

(4) 遠隔地から都心への変化の様子を考察する。

III 研究結果

○すべての駅前について半径150～300m程の地域内について歩きまわり、商店やバス停などを略図にしたが、紙面の都合上省略する。この資料をもとに、①駅前の分類 ②遠隔地から都心への変化の2つの面から考察した。

① 駅前の分類

方法(1)をもとにして各駅を次のように分類

類別A 都心1……大阪市内の市街地 類別B 都心2……他の市の中心地

類別C ターミナル 類別D 住宅密集地 類別E 新興住宅地

類別F 田舎 類別G 観光地

○近鉄南大阪線（長野線）

河内長野 B	汐の宮 F	滝谷不動 F	川西 F
富田林西口 F	富田林 B	喜志 D	古市 C
道明寺 G	土師ノ里 D	藤井寺 B	高鷲 E
恵我ノ荘 D	河内松原 B	高見ノ里 D	布忍 E

河内天美 D	矢田 D	針中野 A	今川 D
北田辺 D	河堀口 D	大阪阿倍野橋 A	

○近鉄奈良線

奈良 B	新大宮 F	西大寺 C	あやめ池 G
学園前 E	富雄 E	東生駒 F	生駒 B
石切 F	額田 F	枚岡 D	瓢箪山 D
東花園 F	花園 D	若江岩田 D	八戸ノ里 E
小阪 B	永和 D	布施 B	今里 D
鶴橋 C	上本町 A	日本橋 A	難波 A

(類別A) — 都心1



都心1の商店の割合（抜粋）奈良線より

駅名	G	K	N	I
難波	6.3	5.4	15.8	1.2
日本橋	1.7	11.6	7.4	1.7
上本町	2.3	10.5	4.1	2.9
平均	3.4	9.2	9.1	1.9
全体平均	2.1	5.3	7.3	3.3

企業発達の条件

1. 交通網（主に鉄道）の発達
 2. 関連企業の近在
- 集中を生み企業街形成

写真 類別Aの駅前（阿倍野橋）

(類別B) — 都心2

1) バスターミナル……かなりはっきりした形で形成されている

(理由) 人口が多いのに、Aのように鉄道網が発達せず、バス網が発達する。また後に述べる人口移動手段の法則の影響。

1) バスターミナル……形成されない

(理由) 鉄道網が発達し、道路状況に影響されるバス網は発達しにくい。ターミナルを作るスペースもない。

2) 自転車置場……形成されない

(理由) 都心に自転車で来るバカは少なく、それだけのスペースもない。また危険である。

3) 商店街……規模が大きく数も多い

(理由) 利用者が多く、店が多いのも当然。

4) 官公庁・企業街……規模が大きく、必ず形成される。

(理由) 企業発達の条件による。

5) 商店の割合

○多い……貴金属(G)、娯楽(K)、衣料品(N)

(理由) ぜいたく品が多い。これは買い手が少なく人の集まる所に多い。

○少ない……教育(I)

(理由) 実際の人口が少ない

○他に洒落た飲食店(T)が存在する。

2) 自転車置場……はっきりした形でないが一応ある。放置も多い。

(理由) バス網発達の為、自転車利用はあってもしれている。

3) 商店街……A程でないかわりに大きいものが存在

(理由) 日常の利用客が多いため。

4) 官公庁・企業街……存在するが小規模

(理由) 都市の中心地であるから。

5) 商店の割合……平均的だが、やや食料品が多い。



類別Bの駅前(河内長野)

(理由) 1つの町を形づくっていて、日常の利用客向けに、なんでもそろろう、という感じになっている。(一般向である)

(類別C) — ターミナル

ターミナルだからといって特に駅前に変化は見られず、西大寺は新興住宅地、古市は都心2に属するようである。

(類別D) — 住宅密集地

1) バスターミナル……ほとんどない

(理由) 乗客は都心2に吸い寄せられ(法則1より)バスを使う必要性も、スペースもない。

2) 自転車置場……平均300~500㎡のものがある。

(理由) 範囲がせまく自転車で通える。またバス網の未発達(法則1, 2)にもよる。

3) 商店街……数は少ないが中心となるものがある。

(理由) 店数が多く商店街ができるが、2つまでは至らない。

4) 官公庁・企業街……ほぼなし

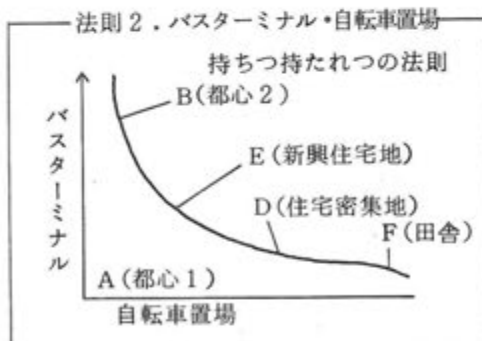
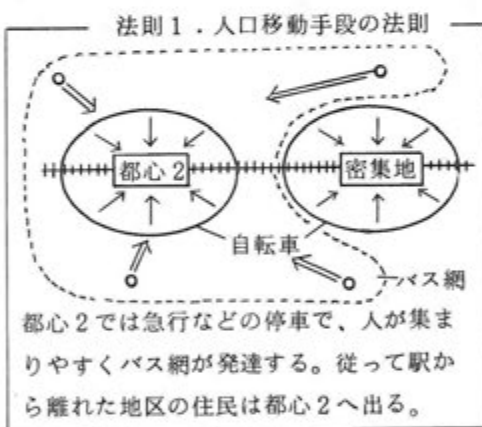
(理由) 企業発達の条件に適さない。

5) 商店の割合

・多い……食料品(M)、電気(O)

(理由) 生活必需品の需要が多

く、従って供給が増え、店数も増える。



・少ない……貴金属(G)、皮革製品(Q)

住宅密集地商店の割合(抜粋)奈良線

駅名	M	O	G	Q
今里	14.9	3.4	3.4	1.1
永和	10.1	2.5	3.8	0
若江岩田	14.9	5.0	0	2.0
花園	16.9	4.2	1.4	1.4
瓢箪山	12.9	3.6	1.4	0.7
平均	13.9	3.7	2.0	1.0
全体平均	9.7	2.5	2.1	1.6

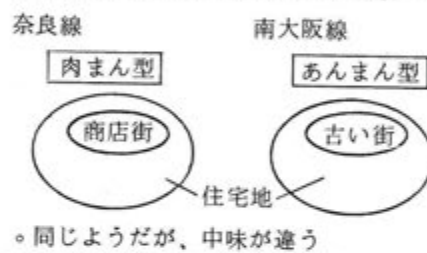
(理由) 人間心理の影響より、ぜいたく品は都心で買うことにより安心感をもたらす。従ってこの付近での需要が少ない。

人間心理の影響

1. ぜいたく品は都会で買うものである
2. 食料品・飲食店は特定の店に決定

(類別E) — 新興住宅地

新興住宅地肉まん・あんまんの現象



3) 商店街……奈良線には形成され南大阪線は少ない

(理由) 新興住宅地肉まん・あんまんの現象の影響

4) 官公庁・企業街……ほとんどない

(理由) 町自体が新しいので

5) 商店の割合……平均的値を示す
(理由) 町づくりが計画的だから
注) 4, 5は奈良線(肉まん型)をモデルにしている。

(類別F) — 田舎

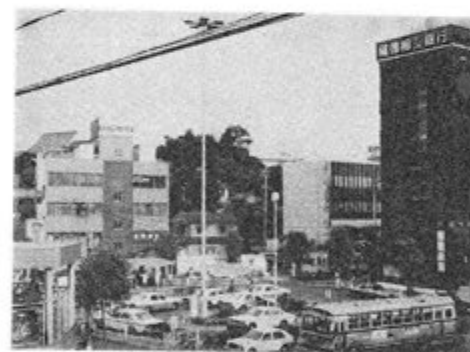


1) バスターミナル……

奈良線では大きいものが、バス会社未発達の南大阪線ではあまりない。
(理由) 計画された町とそうでないものの違い(左図参照)

2) 自転車置場……バス会社のように地域差がなく、どこにでも存在。

(理由) 人口が多く又、運賃高の影響。



類別Eの駅前(富雄)

1) バスターミナル……ほとんどない
(理由) とにかく人口が少ない

2) 自転車置場……小規模だが存在することが多い

(理由) バス網未発達により自転車を利用せざるを得ない。

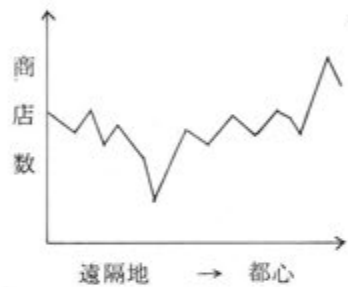
- 3) 商店街, 4) 官公庁・企業街……もちろんない
 5) 商店の割合……全体数が少なく割合としては述べにくい、食料品店が多いようである。

(理由) 典型的な生活必需品であるため 前頁写真 類別Fの駅前(汐の宮)
 (類別G) — 観光地
 属するものが少なく、結論は出しにくい。町としての構造はあやめ池はFに近く、道明寺はDに近い。

② 遠隔地から都心への変化

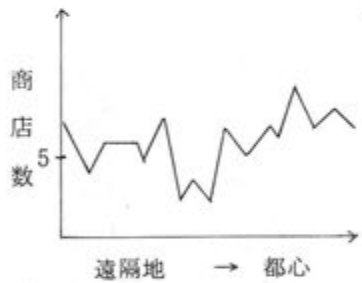
方法1)の調査結果をもとに各駅ごとの商店数の変化をグラフに表すことにより、遠隔地から都心への変化をみる。

(A) 医療・医薬



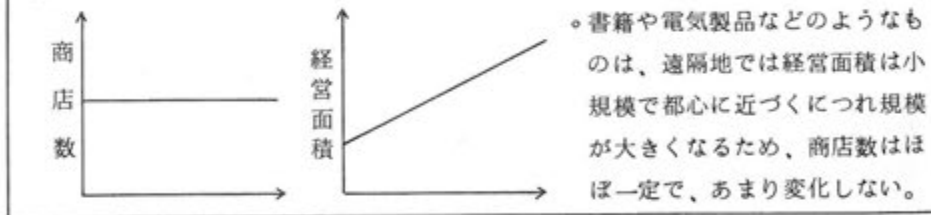
◦あまり変化はみられないが、都心に近づくにつれて、増加していることがわかる。
 [理由] 人口にあまり関係なく、どこの町にでも必要最低限〔内科・外科・歯科など〕のものは存在しているので、大きな変化はみられない。
 (7~8軒前後で一定にちかい)

(B) 印刷・写真・書籍



◦約5軒を境に平均的である。
 [理由] 本来ならば、都心に行くほど増えそうなのだが、都心では規模の大きいものも多く、経営面積が拡大していくため数はあまり増えない。(法則3)

法則3. 経営面積拡大の法則



◦書籍や電気製品などのようなものは、遠隔地では経営面積は小規模で都心に近づくにつれ規模が大きくなるため、商店数はほぼ一定で、あまり変化しない。

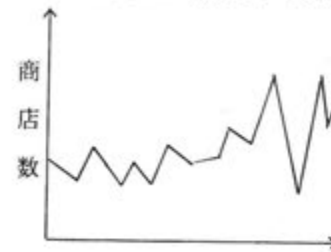
(C) 運輸・通信

◦商店数があまりにも少なかったので省く。

(D) 家具

◦商店数があまりにも少なかったので省く。

(E) 家庭日用品雑貨・装飾品



◦都心に近づくにつれ、少しずつ増えていく。
 [理由] 洗剤、ティッシュペーパーなどは生活必需品であるが故に、あまり大きな伸びは示さないが商店総数の変化によく似た形(利用客の数に等しい)を示しているようである。

(F) 事務用品

◦商店数が少なく、正確な資料が得られなかったため省く。

(G) 時計・貴金属・美術工芸

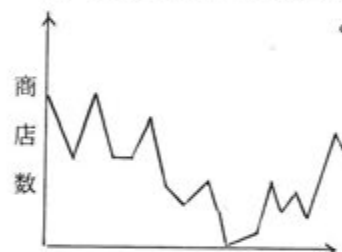


◦都心に近づくにつれ大幅な伸びを示す。
 [理由] 先に示した人間心理の影響その1「ぜいたく品は都心で買うもの」の考えによりこのような物を買う場合、多くの人は都心へと向かうようになるため。

(H) 機械

◦商店数があまりに少ないため省く。

(I) 教育・宗教・公共施設(学習塾、文化教室など)



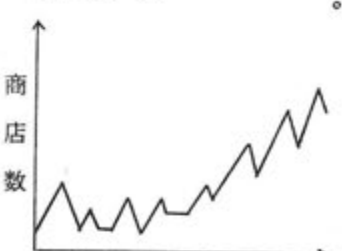
◦あまり大きな変化はなく、むしろ遠隔地のほうが比較的多いようである。
 [理由] 学習塾では利用者が学生で通うのが夜になる。また数々の文化教室も通う奥さん連中はわざわざ都心まで出て来る必要もない。従って、文化的環境に恵まれた遠隔地に数多くある。

(J) 金融



◦あまり大きな変化はないが、都心に行くほど少しながら増えている。
 [理由] 生活するうえでやはり必要なため、どこにでもできる。そのため、やや増の状態になる。しかし、都心へ行くほど規模が大きいため、その増えの割合は小さい。

(K) 娯楽



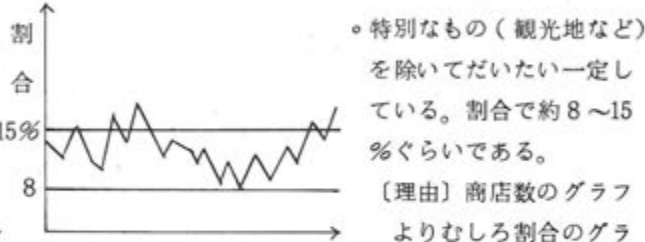
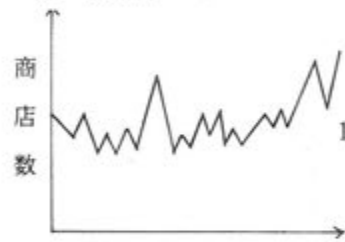
◦都心に近づくにつれ大幅に伸びる。
 [理由] 勤め人の必理としては、自宅付近では人目が気になり娯楽に没頭できない。従って勤め先付近(企業の多い都心)では、この数が増えるのではないかと。また、このような店は歓楽街というようなものを生むため、少し多い所には、さらに増える可能性がある。

(L) サービス・自由業



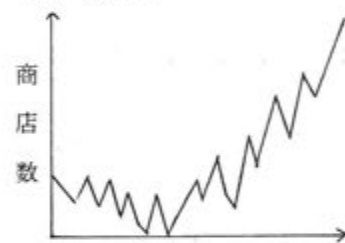
・都心に近づくにつれ、じょじょに伸びる。
 【理由】これに含まれる理美容店、不動産関係などは人によって利用する数というものはあまり違いがないため、商店総数の変化に準ずる。つまりは利用客に対応するような形で変化していく。

(M) 食料品



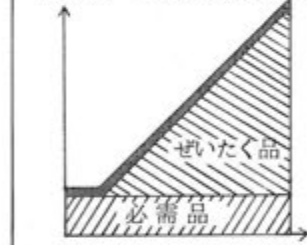
・特別なもの（観光地など）を除いてだいたい一定している。割合で約8~15%ぐらいである。
 【理由】商店数のグラフよりむしろ割合のグラフに注目してもらいたい。典型的な生活必需品であるため、みやげ物の品などをのぞき、だいたい一定する。

(N) 衣料品



・都心に向かうにつれ、大幅にのびる。
 【理由】衣料品には必需品としての衣料（下着・くつ下）と、ぜいたく品としてのもの（毛皮・コートなど）の2つにわかれる。必需品は都心に向かって変化はあまりないが、ぜいたく品が大幅にのびるため全体として大幅にのびる。

法則4. 二面性商品増加傾向の法則



ぜいたく品と必需品の2つの性格をもつものは、必需品は遠隔地も都心もあまり変わらないため、 のようになり、ぜいたく品は、都心に向かうにつれて、 のように大幅にのびる。そのため、全体としては黒線のように都心に向かうにつれ、大幅な伸びを示すのである。（その他の例）皮革製品

(O) 電気・ガス

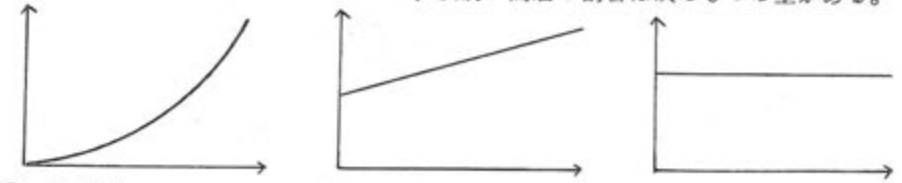
・平均的にあり約4軒前後である。→ 法則3. 経営面積拡大の法則より

(R) 百貨店・スーパー・市場



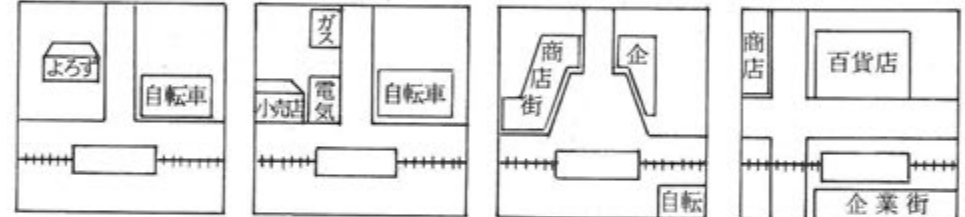
・約2軒前後で平均的に存在する。
 【理由】経営面積拡大の法則によって、都心近くでは近鉄百貨店、高島屋など規模が大きいが、遠隔地では、青空市場やスーパー○×などずっと規模が小さい。また、これらは、そんなに増えるものでもないため。

(P) 園芸 (Q) 皮革製品 (T) 洒落た飲食店 (S) 飲食店は紙面の都合上省く。
 まとめ・・・遠隔地から都心に向うときの、駅前の商店の割合は次の3つの型がある。



- ① 急増型
 G,K,N,Q=ぜいたく品
 ・人間心理の影響より、都心へ行くほど、ぜいたく品の店は増える。
 （二面性商品も含む）
 - ② やや増型
 A,E,J,M,S
 =生活必需品
 ・生活必需品は、どんな町でも必要性に変わりはなく、そのため商店総数の変化に準じて、都心ほど増える。
 - ③ 横ばい型
 B,O,R=都心ほど規模の大きいもの
 ・経営面積拡大の法則により、都心へ近づいても経営面積が広がるだけで、商店数にあまり変化はない。
- ④ 例外 ⇒ 学習塾など；I
 ・教育関係は環境などの影響で都心へ行くほど減少。

総合的な駅前の変化の様子



- ① よろずや、自転車置場ができる。もちろん商店街などというものは無い。周辺地域は田畑や山の場が多い。
- ② よろずやの分解が起こり、食料品を中心に小売店が増える。本屋、電気屋など、一とおりの規模は小さい。
- ③ 駅前にバスターミナルができ、自転車置場は駅前から離れた。商店街も形成され、中小企業なども存在する。
- ④ 道路が広く、企業の規模が大きくなる。さらに商店の規模も大きくなり百貨店もできる。ビル街をつくり都心となる。

IV 総括〔感想・反省〕

いろいろな観点から駅前というものを見てきたが、この研究はすべての面で発見づくめであったように思う。参考文献は皆無、歩き、調べ、資料を自分たちでつくることによって真の研究ができた。この冊子では、かなり内容を削りとり、ほとんど結論しか書いていない。実際は、ノートで100ページほど要したのだが・・・。研究方法は、二人で奈良線、南大阪線の駅前をすべて歩きまわった。途中、300mlのペプシコーラを飲んで感動したり 王将の餃子を食べると喜んだり、けっこう楽しく調べた。が、さすがに1日に5駅ほどまわる日はこたえた。このように苦勞をのりこえ、ついに研究は完成したわけだが、やっぱりがんばってよかったということを感じて痛切に感じる。【本音】ぼくらの目標はこの冊子にのること、後輩諸君は冊子にのる栄光を目指してがんばって欲しい。
 “駅前には、その町の性格を克明に表し、それを探ることは町を知ることに通じる。”

～ 法則発見こそ自由研究の到達点である 土生・沢口 ～